

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

使い魔は抜剣者

【作者名】

ハロルド

【あらすじ】

元・帝国軍人であり「抜剣者」と呼ばれているアティは気が付けば見知らぬ世界に「召喚」されていた。1ー1ゼロの使い魔とサモンナイト3のクロスオーバーになります

壊された日常

「#@?」

「いや、何を言ってるのか分からないんですが……」

ああ、なんだか厄介な事に巻き込まれたみたいです。これも全部、アレのせいでしょうか……？

終業を告げる鐘の音を聞き、もうそんな時間なのかと軽い驚愕を覚える。これも教え子であるウィルが手伝ってくれるお陰かなと思いつつ、皆に終わりを促す。

「はい、今日の授業はこれでおしまいです」

今日はスバルくん達にせがまれて召喚術に関するイロハを指導していた。とはいっても軍学校で習った程度の知識なので、本場の召喚士ほど詳しくはないけれど。でも知識量なら負けないくらいに蔵書が揃っているし、スバルくん達も普段から使っているため教える分には特に問題がなかったです。

「なあ、先生の召喚術見せてよ!」

「あ、僕も見たいです」

「マルルウも、先生さんの見てみたいです」

そんな風に純な瞳を6つも向けられては無下にも断れません。やれやれといった風情のウィルを視界の端に捉えつつ、仕方がなしと無属性の置物系を召喚するため白のサモナイト石を取り出す。……スバルくん達としては、もっと強力なものを見たかったのかなと思いついた時には既に遅し。召喚術は実行に移され――

「え?」

「あれ?」

「な、なに?」

「おやおや?」

「あら……?」

何時もとは違う光、私が狙った召喚術の発動時とは明らかに違う気配。これは――

「ッ!! 皆、離れて! 暴発です!」

召喚者の意図したモノではない、別の召喚獣が召喚されてしまう事を「召喚術の暴発」と言う――先程、授業で教えたばかりの知識だった。

「うわっ!」

「ッ! ウィル!!」

慌てたためか、ウィルが石に蹴躓いてしまう。テコが助け起こそうとするも間に合わない、こっぴなったら――!

思い立つと同時に、私の身体はウィルと召喚術の間に瞬時に割り込み、襲い来る衝撃に備えた。そうしてその光が私に触れた刹那、大砲をぶっ放したかのような爆音が響き渡り、私の身に衝撃が走る。すわロレイラルの機械兵士でも呼び出してしまったのかと眼を懲らしてみても、そんなものは影も形もない。疑問に思いながら土煙が晴れるのを待つと――

「
」

見知らぬ人が、聞き慣れない言葉で喋っていた。もしかして私は「人間」を召喚してしまったのだろうか、だとしたらシルタインの出身のはず。しかし言葉が通じない人なんていなかったような……？

と、その時に私は気付いた。周囲の景色が、私のいた島とは大きく異なっている事に。

スバルくん達の姿はなく、私が開いていた教室の跡もない。後ろにいたはずのウィルも見当たらない……これはもしかして

「私が、召喚された……？」

置き去り

「お願い！美しく神聖で強い、私だけの使い魔……来て！」

爆音。相も変わらず、私の行使する魔法はことごとく失敗に終わる。

泣きたくなる、私は誇り高きウァリエール公爵家の三女なのに。貴族なら使えて当然の魔法がどうして使えないの？基本となるコモンスペルすら失敗する貴族なんて、貴族の風上にもおけない。私を嘲笑う学友達に囲まれて、私を気遣うコルベール先生に後一度だけとチャンス願う。

少しだけ困ったような顔をして、あと一度だけの真正銘最後のチャンスを掴む。もうこうなったらヤケクソだと、私は通常使われるのとは違う、私の思いを載せたスペルで召喚を試みた。

しかし結果はまたもや爆音。やはり私には無理なのだろうかと、半ば諦めかけたその時。徐々に晴れてゆく煙の中に影が見えた。遂に召喚出来た、とっつすら涙を滲ませて煙が晴れるのを待てば――

「に、人間……？」

赤い髪に白を基調とした服とマント、武器の類も杖も見当たらない……平民？何よそれ！こんなにも苦勞に苦勞を重ねて、私が召喚したのは平民だって言うの!? 始祖プリミルは私がそんなに憎いの

!? ああああもっ！

「み、ミス・ウ、アリエール！ 落ち着いてください！ いくらなんでも殺すのは駄目です！ 貴女のやるせない気持ちも充分理解できませんが……！」

「じゃ、じゃあやり直しを要求しますコルベール先生！ ウ、アリエール公爵家の娘が人間を使い魔にするだなんて前代未聞の恥です！」

でも「これも伝統で〜」「早くコントラクト・サーウ、アントを〜」などと押し切られ、結局なし崩し的に契約させられる羽目に。もっつ……家事は出来そうだけど、戦闘にも調達にも使えなさそうじゃない。はあ……感謝しなさいよ？ 貴族にこんなことされるなんて有り得ないんだから。貴女が男だったらどうにかしてた所よ……ちよっ、暴れないですよ。

「 中 !? 」

ずいぶんと田舎から来たのかしら？ 言葉が全然通じないわね、まあ契約すれば幻獣とだって意思疎通が出来るんだからたぶん大丈夫でしょ。んっ……ふう、終わり。まあ予想外の事態だったけど、私付きの専属召し使いが出来たとでもポジティブに解釈しておこう。そりゃあ使い魔やら平民やらでまだどうこう言われるだろうけど、召喚出来ただけマシよ。なにせ初めての魔法成功なんだもの、喜びも一塩ね。

「い、痛っ〜！」

「あら、ルーンの効果かしら。言葉、通じてるわよね貴女？」

「えっ……あ、はい」

うーん。かの憎きツェルプスターにも勝る勢いの凶器が二つか

……敵ね。見た目的に、性格はツエルプスターの対極に位置してそんな感じではあるけど。まっ、一応こんなでも生涯のパートナーな訳だし。平民とはいえ優しくしてあげようかしら？

「あ、あの……？」

「ほう、これは珍しいルーンですな。すみませんが、宜しければスケッチさせていただいても？」

「え？ ええと、はい」

「……よし。それでは皆さん、各々校舎に戻ってください！
ス・ヴァリエールとそちらの方は後でオールド・オスマンのところへ来てください！」

……あれ？ 一部の平民、マントしてる……？

「……ふう、疲れたわね。ああ、貴女も座っていいわよ」

そう促されて、彼女の部屋にあった椅子に深く座り込む。余程の高級品なのか、軍学校にあったものより坐り心地は良い。それとも単に精神的疲労がそう感じさせているだけなのか、それは今の私には判断がつかない。

今日は訳の分からない事が起きた。

初めは召還術の暴発、普段の私ならしないような有り得ないミス。そしてそれに巻き込まれ、目を開けばそこは見知らぬ世界。どうやら何らかの要因により私の方がこちらの世界へ召還されてしまったらしい、しかしこれは未だ推測の域を出ない。まだマトモに目の前の少女と会話を交わしていないため、これから判断していくとしよう。

「まあ、まずは自己紹介から初めましょうか。私はここトリスティンのウゝアリエール公爵家3女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ウゝアリエール。あなたは？」

「あっ、貴族の方ですか。私はアティと言います。元・軍人でしたが、今は家庭教師をやっていますね」

「ふーん。女で軍属なんて珍しいわね、という事はそれなりには強いのかしら？」

「えーと……アハハ。まあ、それなりには……」

「どうやって説明しましょうか。ああ、大変。そもそも召喚術が使えないのかな……？ 前途は多難だなあ。」